教育博物館の平面計画について

A STUDY ON ABOUT THE FLOOR PLANNING OF THE EDUCATIONAL MUSEUM

河田 健*

Takeshi KAWATA

The educational museum included the office and the library in time of opening of 1877. The plan in 1881 is an exhibition room the entire building, and seems a finished type.

The plan of The Kyoto museum exists as a museum project plan planned to a simultaneous period, The educational museum and The Kyoto museum are the flow plannings based on the same idea. It is thought that The plan of The Kyoto museum is transmitted from Makimura to Tanaka through Kido is high, and The educational museum was planned based on The plan of The Kyoto museum.

Keywords : The educational museum, exhibition movement line, plan of The Kyoto museum,

Fujimaro Tanaka, Takayoshi kido, Masanao Makimura

教育博物館, 展示動線, 京都博物館案, 田中不二麿, 木戸孝允, 槇村正直,

1. 序

写真1 教育博物館

明治初期、博覧会や学校教育の導入とともに、わが国に博物館が導入された。当初は昌平坂学問所や薩摩藩装束屋敷など既存の日本建築を利用したもので対応していたケースが多く見受けられるが¹⁾、明治10年には洋風建築による教育博物館が開館している。この教育博物館は、わが国で博物館として建設された初期の博物館建築であり、その平面計画は順路動線を採用するなど博物館独特の特徴を有している。

教育博物館の平面は、明治14年の「教育博物館案内」に載せられたものが知られている。²⁾ この平面図は「国立科学博物館百年史」(以下「百年史」と記す。)や「写真で見た国立科学博物館120年の歩み」、その他椎名仙卓の著書など博物館史の文献に当時の状況を知

る資料として取り上げられている。³⁾ 教育博物館の開館は明治10年8月であり、明治14年の平面図は開館当初と若干変わっている可能性が考えられるが、開館当初の平面は近代建築および博物館史の分野では明らかにされていない。その他教育博物館は順路動線を可能とする平面計画となっており、この特徴はほぼ同時期に計画されたと考えられる京都博物館案⁴⁾と共通点を確認することができるが、当時の博物館計画の関係について考察された研究は見いだせない。

そこで本稿は、教育博物館の平面計画について考察を行い、開館当初の平面計画を検証すると共に、類似した特徴を持つ計画案である京都博物館案との関係について考察するものである。教育博物館の平面計画について検証することは、わが国の黎明期の博物館の施設整備過程を知るうえで重要なことであると考えている。

なお文部省の博物館は、明治4年に設立されるが博物館事務局に合併され一時閉鎖、分離後の明治8年5月に東京博物館と改称、更に明治10年1月には教育博物館と改称され期間によって名称が変わっていくが、本稿では当該施設開館当初の教育博物館の名称で統一するものとする。

2. 教育博物館の計画された経緯について

明治初期の博物館は、お雇い外国人が計画しているものが多いなか、教育博物館の計画・設計は日本人が行ったとされているが、具

* 佐藤総合計画 主任担当

Architect, Design Chief, AXS SATOW INC.

体的な設計者および建築計画・設計期間は特定されていない。堀越三郎によると教育博物館は「本邦建築家設計の官庁建築」⁵⁾と整理されている程度であり、その他「百年史」の中では「博物館の新築は学校に属するものとして、文部省の手で造営されることになり」⁶⁾と記述されている。教育博物館の計画された経緯について整理すると以下ようになる。

文部省の博物館は、明治4年にわが国最初の博物館として設立されたが、明治6年3月太政官正院におかれた博覧会事務局に合併された。文部省は博物館の設置目的の違いを主張し、博覧会事務局からの分離する動きを行うことになる。教育博物館が単独分離するまで文部大輔田中不二麿と町田久成が対立したことが知られている。⁷⁾ 田中不二麿は、尾張藩出身で明治4年より文部大丞となり岩倉使節団に加わっており、明治7年より文部大輔となる人物である。⁸⁾

合併から2ヵ月後の明治6年5月8日、2週間後の5月30日に田中不二麿は、文部省の博物館と太政官正院の博覧会事務局との分離の上申を正院に提出している。正院から回答が無いため、田中不二麿は7月15日に太政大臣三条実美に、11月10日には右大臣岩倉具視に、更に翌年明治7年1月13日再度三条実美に上申書を提出している。そして2月14日には文部卿就任早々の木戸孝允から三条実美に上申書を提出している。⁹⁾

明治8年2月9日文部省の博物館の分離は、太政大臣三条実美より認められると、明治8年3月13日博物館・書籍館両館が同居並存として湯島の昌平館に事務局を設置した。館長は博物館書籍館を兼務して畠山義成が就任した。博物館側の職員は、御用掛として永井久一郎、山科元行、有田速。¹⁰⁾ 畠山義成は、薩摩藩出身で元治2年の薩摩藩英国留学生15名のなかの一人である。慶応4年よりアメリカのラドガースカレッジで学び、明治4年の岩倉使節団に随行し久米邦武と共に書記官を務めている。その後明治6年12月東京開成学校長兼外国語学校長となっていた。¹¹⁾ その他文部省にはラドガースカレッジで教鞭をとっていたお雇い外国人ディビット・マレーが在籍していた。

ディビット・マレーについては、教育博物館の設立に大きな影響を与えた人物として、博物館史の分野でいくつか取り上げられており、資料収集を中心に彼の働きが明らかにされているが、施設整備に関係している記述は見いだせない。

政府は明治9年のフィラデルフィアで開かれる独立百年記念万国博覧会への参加を決め、明治8年1月には米国博覧会事務局を設置し準備にとりかかっている。吉家定夫によると、ディビット・マレーの妻マーサから従姉妹のルーシーに宛てた書簡より、文部省は6月にはディビット・マレーをアメリカに派遣するよう打診していたことが確認されている。10月7日には正式に契約を交わしており、この時の契約内容が明らかにされている。ディビット・マレーとの契約内容は、「①フィラデルフィア万国博覧会での各国の教育展示を視察調査のうえ報告書を作成すること。②東京に設立を予定されている学術博物館に展示するさまざまな教育関連物件（教育関係書、学校の器具備品、校則、校舎の模型など）を収集購入すること。③望遠鏡の購入の三つである。」と記述されている。¹²⁾ ここに示されている「東京に設立を予定されている学術博物館」が教育博物館のことである。ここでもディビット・マレーに対して施設整備に関する調査業務等は含まれていない。そしてディビット・マレーは10

月11日より横浜からアメリカに向け出発することになる。

明治9年3月22日田中不二麿は太政大臣三条実美に上野に博物館を建設する上申を提出した。この上申の文書の中で田中不二麿は、「上野山内當省用地ニ於テ先以學術博物場ノ一部ヲ構造致度将来逐次増築逐ニ該館ノ完全ニ至ルヲ要ス尤該費用ハ金壹万五千圓以内ノ見込ニテ當會計年度當省額外常費營繕費ノ範圍ニ在テ可相辦候條速ニ充裁相成候様致度此旨相伺候也」¹³⁾と記述している。つまり取り急ぎ施設の一部を整備し、順次増築しながら施設を整備することを想定しているというものである。そして最初の施設整備にかかる概算費用15,000円を算出している。

上申後まもなく教育博物館は、3月29日博物館の事務局は湯島から上野山内の東四軒寺町跡（現在の国立科学博物館あたり）の東京医学校教師館の第一舎に仮移転している。

ディビット・マレーにつづきフィラデルフィアの独立百年記念万国博覧会には、田中不二麿、畠山義成、阿部泰蔵、手島精一、出浦力雄の5名が訪れている。彼らは明治9年4月から明治9年12月までアメリカに出張しており国内にいなかった。¹⁴⁾

教育博物館の建築計画は責任者である田中不二麿・畠山義成不在の中進んでいったとは考え難く、彼らの渡米以前に行われていた可能性が高いと思われる。予算や工期を把握する上でも田中不二麿が博物館建設を上申した明治9年3月22日の段階では既に計画案が出来上がっていた可能性が高いと考えられる。田中不二麿に代わって業務を行っていたのは九鬼隆一である。九鬼隆一は、畠山義成の病氣療養中から館長事務取扱を行っていた。¹⁵⁾ 田中不二麿・畠山義成不在時に、九鬼隆一は農商務省の博物館との敷地問題等に関して調整業務を行っていたことが確認されているが、¹⁶⁾ 建築計画との関わりについては今のところ文書等確認できていない。教育博物館の建築計画は、やはり渡米前にほとんどのことが決まっていたと考えるのが妥当であろう。

以上のことから教育博物館は、単独分離した明治8年2月以降、田中不二麿・畠山義成が渡米する前の明治9年3月まで約1年の間に建築計画が行われていたものと設定できる。

教育博物館の新築工事は会計年度内での予算執行の関係から6月中旬に着工した。新館は12月には一部を残してほぼ出来上がっていたとされており、明治10年3月9日に落成、8月18日開会式を行っている。¹⁷⁾

3.開館時の教育博物館の平面計画について

先にも述べたように教育博物館は、施設の一部を整備し、順次増築しながら施設を整備することを想定しているというものであった。つまり明治10年の開館当初の平面計画は、施設整備の第一段階であったといえる。

明治14年の「教育博物館案内」に示された平面図では、形状は左右対称の直線状の平面形をしており、中央エントランスの左右に位置する長方形の展示室の短辺方向を壁で仕切り細長い部屋割りとし、端部の部屋に繋がっている。こうすることによって1階中央から入り1階をすべて観覧した後、2階を観覧し再び1階に戻る一筆書きのように順路通り廻れる特長のある動線計画を採用していた。

展示室は、明治14年の平面図では13室に分かれて配置されている。この13室とは、部屋数のことではなく、展示区分を示している。

1 階エントランス正面に体育用具の小部屋があり、そこから右回りに、第一室 家庭玩具・幼稚園恩物・鉱物教授用具、第二室 教学用具・学校模型並ニ撮影・小学物理器械、第三室 物理器械、第四室 書画学用具・化学器械・地学及星学器械、第五室 盲聾者及痲子教育用具・商業教育用具・卒業免除並ニ賞牌・教育用具、第六室 学校用椅子卓子類・比較解剖商品、第七室 生徒制作品並ニ試業答書画類。

2階に上がり左回りに、第八室 内国鉱物類・外国鉱物類・地質学用具・古生物模造類、第九室 植物類、第十室 哺乳動物類、第十一室 鳥類、第十二室 爬虫類、第十三室 魚介類となっていた。

室名の記入の無い部屋が、1階エントランス部分と2階中央階段横部分にある。1階エントランス部分は守衛室、2階中央階段横部分は何らかのバックヤードであったと考えられる。

明治10年開館当初の教育博物館の平面計画を知る手がかりとして、文部省年報（以下「年報」と記す。）がある。この「年報」には当時の教育博物館の活動が記されている。

明治10年の「年報」には、施設整備に関して次のように記されている。

「三月九日文部省上野公園地内新設ノ廈屋及ヒ地所ヲ本館ニ交付ス此地ハ公園ノ西北隅ニ位シ地坪一萬六千七百四十九坪余アリ廈屋ハ敷地内ノ南部ニアリ其建坪二百十九坪余ナリ之レ素寺院ノ廢趾ニシテ太ク荒蕪ニ属スルヲ以テ更ニ文部省ノ稟准ヲ經テ園庭ノ樹木ヲ移植シ周囲ニ堤ヲ築キ正副二門ノ經營ヲ創メ尋テ本館事務所ヲココニ移シ車坂上ノ仮館ヲ大學醫學部ニ還付ス是ニ於テ會テ蒐集セシ物品ヲ悉ク新館ニ移シ之ヲ類別シテ陳列場十四室ニ列序ス其後又物品ノ増加セルニ隨ヒ陳列室ヲ分合セハ廢置シテ十八室トス」¹⁸⁾

これによると本館の規模は、延床面積219坪（約724m²）あった。明治14年の平面図にはスケールの記載が無く、部屋の実寸の寸法を知る資料は確認できていない。そのため延床面積724m²から逆算す

ると、全体では正面側間口方向約50m、奥行き約10.5m程度の規模であったと考えられる。中央部のホールは10.5m×10.5m、ホールに隣接する部屋は13m×5.5mを2等分し細長い部屋となっており、端部は8m×6.5m程度、そして1階ポーチ部分は2m×5m程度の規模であったと設定できる。¹⁹⁾

工事は明治10年3月9日にはほぼ竣工しており、事務所を移転している。本館以外に付属棟は建設されていないので、事務室は当初本館内に配置されていたことを示している。職員は、館長1人、館長補1人、書記3人、画工1人、物品掛6人、同附属4人、看守3人の計19人で、看守を除く16人が事務室で執務していたと考えられるが、事務室がどこに位置していたかは示されていない。

展示室については3月から開館する8月までの間に展示室は当初の14室から18室に整理し直されたことが記載されている。しかし竣工直後に増築および間仕切り改修等を行ったとする記述がないことから、ここで記されている18室についても部屋数ではなく、展示区分を示しているものと思われる。「百年史」には「当初の14室から後に18室に拡大したことがわかる。」²⁰⁾と記述されているが、これは拡大ではなく、展示区分の再編であったといえる。

開館当初の教育博物館には本館内に書籍室があったことも記されており、明治10年の「年報」の「教育博物館書籍館規則」には次のような記載がある。

「第三條書籍ヲ求覽スル者ハ書名及ヒ自己ノ姓名居所ヲ明記シ之ヲ掛リ吏員ニ出シテ書籍ヲ受取スヘシ但求覽ノ書籍ハ室内ニ於テ謄寫スルモ妨ケナシトス」²¹⁾

書籍室の利用者は、書名と氏名、住所を書類に記入したものを提出のうえ書籍を受け取り室内で閲覧する。つまり書籍室は閉架書庫と閲覧室で構成されていた。明治10年段階での蔵書量は、12,326冊²²⁾であった。書籍室のスペースに関する資料は残されていないため仮に想定すると、これを書架配置すると書庫部分のみで約60m²

写真2 明治14年教育博物館の平面図

程度は必要だった²³⁾と思われる。閲覧席数を10席と想定すると、受付スペースも含めて書籍室は120㎡程度必要と想定できる。²⁴⁾なお明治10年の情報のみでは書籍室の位置は明確になっていない。

明治12年の「年報」には、増築に関する記述が見受けられる。

「當館事務所甚狹隘ニシテ往々事務澁滞スルヲ以テ更ニ一字ヲ増築センコトヲ四月五日ヲ以テ文部省ニ申稟シ同十日同省之ヲ裁可スルヲ以テ直チニ營築ニ着手シ六月ヲ以テ落成セリ 當館ノ物品中重複ニ係ルモノ并ニ陳列前一時貯藏ノ場所ナキヲ以テ八月中文部省ノ裁可ヲ徑テ物品貯藏所一字ヲ建築ス 十二月五日文部省ノ裁可ヲ徑テ當館周圍ノ土手ヲ増築スレハ當館用地ノ中會テ東京府へ貸與セシ中若干坪ヲ返却セシヲ以テナリ 同十二日文部省會テ當館ヨリ申稟シタル書庫并圖書閲覧室各一字ヲ建築スルコトヲ裁可ス依テ其營築ヲ工部省ニ委嘱ス其起工ノ日ハ來年ニアルヘシ」²⁵⁾

これによると事務室は6月に増築。8月にはそれまで無かった収蔵庫を増築。12月5日東京府より敷地の返却を受けて外構の再整備を決定。12月12日に書庫及び書籍閲覧室をそれぞれ増築することを決め工部省に委嘱している。これまで本館にあった事務室、書籍室が別棟に移設されることで、本館内は展示室のみになり、明治14年の平面図に近い形が整っていった。

その他明治12年には展示室の配置順序を変更している。この展示替えについては「百年史」にも記述があり、2階部分が金石→植物→動物の順序に変更されたことを明らかにされている。²⁶⁾この順序は明治14年の平面図にも一致している。その他明治12年の「年報」には、「地質學標品古生化石物品ハ之ヲ別室ニ排置ス」²⁷⁾と記述があり、「古生物模造類」と若干内容が異なっているものの、明治14年の平面図に示された2階端部の小部屋がこの時点で間仕切られていたことが確認できる。

本館の展示については、1階に学校建築の模型、椅子卓子、理化学機器等学校で使用する資料を展示し、2階に植物、動物、金石などの博物標本を展示していた。12年の「年報」では展示替えについて以下のような記述がある。

「階下教育陳列ノ順序モ或ハ兒童發育ノ順序ニ適セサル所ナシトセス然レモ館内餘地ニ乏シキヲ以テ之カ順序ヲ正クスルヲ得ス他日圖書室新築落成シ書籍ヲ此ニ移スノ後當サニ之ヲ改正スヘキナリ」²⁸⁾

1階の教育展示についても展示替えが必要であったがスペースが無いため、書籍室移転の後展示替えを行うというものである。この記述より、書籍室は当初1階部分に配置されていたことが確認できる。その他明治12年7月には「教育博物館書籍室規則」も改正されており、次のように記されている。

「第一條 本室開閉ノ時限ハ本館ト別ナシト雖毎年夏秋ノ際凡二週日ヲ以テ曝書ノ期限トス此ノ期間中ハ閉室ス」²⁹⁾

基本的に展示を行っている部分と開館時間は同じであるが、夏秋2週間閉室しているというものである。つまり書籍室は閉室していても展示動線が変わらない位置に配置してあったものということができる。明治14年の平面図でみると、1階部分正面左側の部分に書籍室が配置されていた可能性が高いと考えられる。この位置は、階段が無く展示動線に影響しない位置であり、また端部の出入口より単独の出入りも可能となる位置である。またこの範囲は蔵書量から想定した規模にも近く、端部と隣接する部屋で約120㎡となる。

スペースの問題により1階部分でできなかった展示替えが、2階

部分で可能だったということは、明治12年の段階で2階部分にスペースが確保できたということになる。明治12年6月には別棟の事務所が竣工し移転していたため、事務室は本館から移転して、スペースが確保できていた。つまり事務室は本館2階に配置されていたことになる。事務室の位置についても、展示動線に影響の無い位置であったと考え、2階部分正面左側の位置が考えられる。つまり書籍室の上階に事務室が配置されていたと推察できる。事務室も同様に約120㎡であったとすると、明治10年に事務室で執務していた人数が16人であったことから、一人当たりのスペースは平均すると7.5㎡/人となる。³⁰⁾若干広く感じられるが、いわゆるオフィスワークだけではなく画工、物品掛など作業スペースを含んでいたとすると、この程度のスペースが確保されていたと考えることができる。

明治13年の「年報」には1階部分の展示室の変更について記載がある。³¹⁾明治13年10月2日に書庫及び書籍閲覧室が完成し、1階部分の展示替えが行われた。これによって本館は明治14年の平面図に示された状態に整えられた。

「年報」以外に開館当初の教育博物館の状況を知る資料として、大森貝塚の発見で名高いモースによる「日本その日その日」³²⁾がある。開館後の明治10年9月11日にモースは他の外国人教授たちと共に教育博物館に招かれている。内容を順に確認していくと「博物館は大きな立派な二階建てで、翼があり、階下の広間の一つは大きな図書室になっている。」と記述している。先にも考察した通り書籍室が1階に配置されていたことが確認できる。その他「細長くて広い部屋は、欧州及び米国から持ってきた教具に関する器具—現代式学校建築の雛形、机、絵、地図、模型、地球儀、石盤、黒板、インク入れ、その他の海外の学校で使用する道具の最もこまかい物—の広範で興味ある蒐集で満ちた。」と記述している。学校教具を展示していることから、これは1階部分を説明した文章であり、明治14年の平面図に示すように、中央エントランス横の長方形の展示室を短辺方向を仕切っている壁は建設当初から仕切られ、細長い部屋が存在していたことが確認できる。

そして「二階には天産物の博物館があったが、これは魚を除くと、概して貧弱であった。」と感想を述べている。³³⁾2階部分が植物、動物、金石などの博物標本を展示していたことと一致している。

そして「この接待宴には、教員数名の夫人達を勘定に入れて、お客様が百人近くいた。いろいろな広間を廻って歩いた後、大きな部屋へ導かれると、そこにはピラミッド型のアイスクリーム、菓子、サンドウィッチ果実その他の食品のご馳走があり、(以下省略)」と記述しており、展示室を一通り見た後、昼食をとったようである。食事のサービスの仕方について、「日本人が貴婦人と一緒に坐っている所へお皿を持って行って、(以下省略)」と記述していることから、立食ではなく着席での昼食だったことが伺える。この昼食をとった場所について、1階2階と展示室を廻ってからこの「大きな部屋」に導かれていること、1階部分は、書籍室と教育展示があることを考慮すると、2階部分で昼食会が開かれたはずである。そして2階部分では博物標本の展示室を通っていることから、先に述べた事務室部分をホールに転用して昼食会を開いた可能性が考えられる。ここで100人が着席して食事をするホール部分のみで約150㎡程度のスペースが必要³⁴⁾である。サービススペースを確保すると、もう少し広いスペースを確保する必要が想定できる。実際には100人

はいなかったと思われるが、2 階部分の中央ホールと左側全体を使用したとして 200 m²程度確保できることから、この部分を使用して昼食会を行ったものと想定できる。このことから開館当初は正面左側の室には短辺方向を仕切っている壁は無く、細長い部屋は存在しなかったのである。

以上のような考察から、教育博物館施設整備の第一段階ともいえる開館当初は、事務室、書籍室が本館内にあり、収蔵庫の無い状態で開館していた。事務室は2 階、書籍室は1 階に位置しており、それぞれ正面向かって左側に位置しており、開館当初から順路動線は採用されていた。

4. 京都博物館案との関係

教育博物館が計画されていた頃、同様な順路動線で計画された平面図が京都で計画されている。オランダ人お雇い外国人のヘールツの作成した京都博物館案は、中央にホールがあり、中央ホール左右の展示室は、短辺方向に仕切られた部屋割りとし、端部の展示室に繋がっている。つまり教育博物館と同様の順路動線を形成しているのである。京都博物館案には尺表記による外形寸法が示されており、1フロアの面積は教育博物館の約3 倍の規模であることが確認できる。規模が大きいため展示室はS 字に廻れる動線が確保できている。中央ホールにはオランダ語でWenteltrap（螺旋階段）の表記があり複数階の構成を想定していたと考えられ、この京都博物館案を整理したと思われる2 階建て案も存在している。ヘールツの作成した京都博物館案の作成時期について、京都国立博物館百年史によると「ヘールツの京都滞在中のものと考えられ、上述の明治八年春から明治九年夏までのこととなる」³⁵⁾とされている。ヘールツの京都滞在中は、京都府舎密局司薬場のおかれた明治8 年2 月から明治9 年8 月までである。³⁶⁾教育博物館の計画時期は、明治8 年2 月から明治9 年3 月までの間であることから教育博物館と京都博物館案の計画時期はほぼ一致することになる。同時期に非常に似た計画案を作成していることから、教育博物館との情報交換があった可能性が考えられるが、このことについて考察された論考は見いだせない。

京都博物館は明治8 年2 月の博物館論告の発布があり、4 月には勅業課の所轄下に博物館組織を設立した。この勅業課は河原町二条下ルの旧長州藩邸跡にあり、博物館事務所もここに置かれていた。³⁷⁾当時京都府大参事であった榎村正直は、勅業政策に積極的であり、京都博物館の計画にも積極的に取り組んでいたものと考えられる。博物館事務所が長州藩邸跡に設置され、その敷地選定を榎村正直が

行ったとされている。³⁸⁾そして榎村正直自身も南側に隣接した敷地に居を構えていたことが明らかになっている。³⁹⁾榎村正直は、同じ長州藩出身の木戸孝允とも交流があったとされており、木戸孝允の日記によると、榎村正直が木戸孝允と面会や書簡のやりとりを頻繁にしていることが確認できる。

木戸孝允となると維新の三傑の一人であり、初期の明治政府の実力者である。木戸孝允は、明治7 年1 月25 日から5 月13 日⁴⁰⁾まで文部卿を勤めている。教育博物館が太政官正院におかれた博覧会事務局に合併された時にも、単独分離するため明治7 年2 月14 日に文部卿木戸孝允から太政大臣三条実美に上申書を提出している。つまり木戸孝允は、一時期教育博物館整備の最高責任者であり、かつ京都博物館整備の責任者である榎村正直と近い関係にあったことになる。また教育博物館整備の実行者である田中不二麿にも深い信頼を寄せており、明治4 年の岩倉使節団の洋行時の日記には、「此度同行中に田中不二麿あり、余の同志なり、且文部省中より随行せり、不日学校の興隆を只希望する而已」⁴¹⁾と記述されている。つまり教育博物館の田中不二麿と京都博物館の榎村正直は、木戸孝允を通じて情報伝達が行なわれていたことが推察できる。木戸孝允の日記によると、教育博物館が計画されたと考えられる明治8 年2 月から明治9 年3 月までの間に、木戸孝允は文部卿を既に辞しているにもかかわらず文部大輔の田中不二麿と14 回会っており交流が続いている。そして榎村正直とは4 回会い、19 回書状のやり取りをしていたことが確認できる。⁴²⁾それだけでなく明治8 年7 月21 日の木戸孝允の日記に次のような記述がある。

「七字前より畠山義成の招に正二郎と同行す同客神田孝平榎村忠直大山覺之助田中不二麿モリー夫妻なり畠山はモリーと同居なり」⁴³⁾教育博物館館長の畠山義成のところに木戸孝允、榎村正直、田中不二麿、ディビット・マレー夫妻が集まったのである。この時の話の内容を知る資料は確認できていないが、タイミングとしては、ディビット・マレーが渡米する2 ヶ月前である。彼らが教育関係の話題を中心に、博物館整備に関する情報交換を行った可能性は非常に高く、施設整備についても話題に上った可能性が高い。この時、あるいはこれに前後して、榎村正直から田中不二麿、畠山義成に京都博物館案が伝達されたものと考えられる。京都博物館はこのヘールツによる京都博物館案を原案として複数の図案が作成されているが、教育博物館には原案とされる図案の存在が確認できない、また原案を作成できる人物が見当たらないことから、教育博物館は京都博物館案を原案として計画された可能性が高い。

写真3 京都博物館ヘールツ案

5. 結

本稿は教育博物館の平面計画について考察し、施設整備について検証を行った。

教育博物館は当初より段階的に整備することが想定されており、明治10年の開館当初には、事務室が2階に、書籍室が1階に配置され、収蔵庫は無い状態で開館していた。展示室は順路動線で計画されており、事務室・書籍室は、正面向かって左側に配置されていたものと推察できる。明治12年6月には事務所を増築、8月には収蔵庫を増築、明治13年10月には書庫及び書籍閲覧室を増築し、さらに明治12年、13年と2度の展示替えを行っている。明治14年に発行された「教育博物館案内」に載せられている平面図は、全館展示室となっており、当初想定されていた教育博物館の完成形はこれに近いものであったと考えられる。

この教育博物館の計画は、施設整備の経緯から考察すると、単独分離した明治8年2月から田中不二麿、島山義成など責任者が渡米する前の明治9年3月までの間に行われたと考えられることができる。これとほぼ同時期に計画された博物館計画案としてヘルツの作成した京都博物館案が存在し、教育博物館と京都博物館案は非常によく似た動線計画となっている。つまりこの2館は同じ考え方に基づく動線計画で計画されており、教育博物館は京都博物館案を原案として計画されたと考えられる。このことについて長州藩出身で元文部卿木戸孝允を通じて文部大輔田中不二麿と長州藩出身の京都府大参事楨村正直とは交流があり、この人脈を通して京都博物館案の図案が教育博物館に伝達されたものと考えられる。

なお明治初期には教育博物館が複数設立されており、設立趣旨や規則に共通点があることが指摘されている。⁴⁴⁾ 今後は施設整備においても各館の関連等について順次明らかにしたい。

注

- 明治10年以前に設立された博物館は、明治4年文部省の博物館は昌平坂学問所、明治6年太政官正院の博覧会事務局博物館は薩摩藩装束屋敷、明治8年奈良博物館は東大寺、明治9年金澤博物館は兼六園の成楽園を利用して設立されている。
- 教育博物館案内 教育博物館編 1881.6
- 国立科学博物館百年史 国立科学博物館編 p.103 1977.10
写真で見た国立科学博物館 120年の歩み 国立科学博物館編 p.20 1998.3、椎名仙卓 図解博物館史 雄山閣出版 p.73 2000.3 などに掲載されている。
- 京都国立博物館百年史 京都国立博物館編 p.42 1997.10
- 堀越三郎 明治初期の洋風建築 丸善 p.157 1929.12
- 前掲 国立科学博物館百年史 p.44
- 関秀夫 博物館の誕生 岩波新書 pp.97-99 2005.6
- 海を越えた日本人名事典 日外アソシエーツ p.375 1985.12
- 前掲 国立科学博物館百年史 pp.23-25
- 前掲 国立科学博物館百年史 pp.28-29
- 前掲 海を越えた日本人名事典 p.375
- 吉家定夫 日本国学監ディビット・マレー 玉川大学出版部 pp.159-163 1998.1
- 前掲 国立科学博物館百年史 p.41
- アメリカに出張した5名については、米国百年期博覧会教育報告 文部省編 p.1 1877.1 に記載がある。出張期間については、手島精一先生伝 手島工業教育資金団 1929年 p.33 によると、明治8年4月26日から明治10年1月8日までとなるが、財部香枝 ディヴィット・マレーとスミソニアン・インスティテューションとの交流 博物館学雑誌 p.31 2005.1 によるとディビット・マレーは、明治9年12月26日に帰朝している。マ

レーのみに先に帰ってきているとは考えにくく、出張時期は多少前後するものと思われる。

- 前掲 国立科学博物館百年史 p.30
- 前掲 国立科学博物館百年史 pp.41-42 その他九鬼隆一研究として高橋眞司 九鬼隆一の研究-隆一・波津子・周造 未来社 2008.8 があるが、九鬼隆一と建築計画を結びつけるような経歴は無い。
- 前掲 国立科学博物館百年史 pp.64-65
- 文部省年報 文部省 第五第一冊 p.456 1877
- 明治14年の教育博物館案内の平面図のスケールを200分の1と仮定して面積を算出すると延床面積は932㎡となる。実際の延床面積は724㎡であることから、教育博物館案内の平面図はレイアウトを考慮して、これを約1.3倍に拡大されていると想定した。また当時の平面図は尺貫法で作図された可能性が高いが、本稿では規模の概略を把握やすくするためメートル法で端数をまるめた形で表記した。
- 前掲 国立科学博物館百年史 p.97
- 前掲 文部省年報 p.458 1877
- 前掲 文部省年報 p.459 1877 書籍欄 存在数の合計である。
- 7段高書架 書架間隔1500 収蔵量200冊/㎡と想定すると60㎡程度必要となる。コンパクト建築設計資料集成 丸善 2000.2 p.200
- 閲覧席10席と想定し、 $(12,326/200+10/0.55)1.5=119.71$ ㎡ 約120㎡とした。前掲 コンパクト建築設計資料集成 p.200
- 文部省年報 文部省 第七第 p.392 1879
- 前掲 国立科学博物館百年史 p.98
- 前掲 文部省年報 文部省 第七第 p.393 1879
- 前掲 文部省年報 文部省 第七第 p.394 1879
- 教育博物館書籍室規則 p.1 1879
- 前掲 コンパクト建築設計資料集成 p.269 これは現代オフィスの設定だが、今回は一つの目安として参照した。
- 前掲 文部省年報 文部省 第八第 p.501 1880
- 日本その日その日2(全3巻) E.S.モース(石川欣一訳) 平凡社 pp.3-4 1970 に教育博物館の記載がある。「日本その日その日」の中に教育博物館の記載があること自体は、椎名仙卓「モースの発掘」恒和出版 1988 のなかで既に明らかとなっている。
- 魚類の展示が充実していたことについては、明治10年段階でモース自身から「合衆国周辺の海洋生物の標本1セット」、ベアードより「魚類の複製セット」、そのほかスミソニアン・インスティテューションより魚類のアルコール漬けのセットを購入していたことが明らかにされている。財部香枝 「ディビット・マレーとスミソニアン・インスティテューションとの交流」博物館学雑誌 全日本博物館学会 pp.31-32 2005.1
- 洋食レストランでの1席当りの床面積を1.5㎡/人と想定すると、100人で150㎡必要となる。前掲 コンパクト建築設計資料集成 p.62
- 前掲 京都国立博物館百年史 p.42
- 根本曾代子「ヘルツ先生没後100周年の回想」葉史学雑誌 第17巻第2号 p.83 1982
- 前掲 京都国立博物館百年史 p.32
- 川村覚昭 鳥地黙雷の教育思想研究 - 明治維新と異文化理解 法蔵館 p.193 2004
- 明田鉄男 維新京都を救った豪腕知事 小学館 p.72 2004
- 大江志乃夫 木戸孝允 中公新書 p.193 1986.3
- 木戸孝允日記二 日本史跡協会 p.127 1985
- 前掲 木戸孝允日記三 pp.147-310 木戸孝允の日記は、その日に合った人物、書簡のやり取りについて氏名役職まで明記されている。
- 前掲 木戸孝允日記三 pp.212-213 正二郎は木戸正二郎、神田孝平は兵庫県大参事、大山覺之助は格之助のことで鹿児島県大参事、モリー夫妻はディビット・マレー夫妻のことである。楨村忠直は正直の誤記である。
- 椎名仙卓 「博物館発達史」雄山閣 p.52 1988
佐藤修啓「明治期における教育博物館の発展と変容」名古屋大学博士論文 PP.59-60 2003

写真1：教育博物館案内 教育博物館編 1881.6 口絵

写真2：教育博物館案内 教育博物館編 1881.6 口絵

写真3：京都国立博物館百年史 京都国立博物館編 p.42 1997.10

(2009年6月4日原稿受理, 2009年10月28日採用決定)